

氏名	小林 あずさ
ヨミガナ	コバヤシ アズサ
学位の種類	博士（美術）
学位記番号	博美第648号
学位授与年月日	令和3年3月25日
学位論文等題目	〈論文〉 隔たりをつなげるー連続体としての美術制作ー 〈作品〉 分岐と合流 〈演奏〉

論文等審査委員

（主査）	東京藝術大学	教授	（美術研究科）	O JUN
（論文第1副査）	東京藝術大学	教授	（美術研究科）	伊藤 俊治
（作品第1副査）	東京藝術大学	准教授	（美術研究科）	齋藤 芽生
（副査）	東京藝術大学	名誉教授	（）	坂口 寛敏
（副査）			（）	
（副査）			（）	
（副査）			（）	
（副査）			（）	
（副査）			（）	
（副査）			（）	

（論文内容の要旨）

筆者は現在に至るまで髪の毛や紐といった紐帯としての意味合いを持つモチーフを中心に、絵画作品とインスタレーションの制作を行ってきた。

本論は自身の制作実践において重要な概念である「隔たり」と「繋がり」をキーワードに論を進めていく。美術作品は隔たりを繋げる存在と定義した上で、関連する美術作品と自作を題材に考察を行い、その枠組みと可能性を探る内容となっている。

論考を行う上で、美術作品が繋げる対象として、送り手と受け手、現実と非現実、知覚対象と心象という3つの存在を設定した。その上で「隔たり」というキーワードにアプローチするにあたって、物語性と視覚性を比較の尺度とした。本論における物語性とは作品における内容（コンテンツ）であり、視覚性とは作品の形式（フォーム）である。自作における物語性で中心の存在となっているものは髪の毛であり、視覚性で重要な作品の形式は通路である。

通路に関しては、ヴァルター・ベンヤミン のパサージュ論を手がかりに、遊歩者が空間を観察し読解する行為に着目した。その上で通路状の空間が美術作品と宗教空間でどのように機能しているかの考察を行なった。通路の形式は空間への没入感と探索行為を強化し、ある特定の体験を模擬的に行う場として、空間の目的を純化させる。

髪の毛に関しては伝承から髪の毛が持つ意味を調べ、その上で関連する美術作品の比較を行なった。髪の毛は紐帯としての意味合いを強く持ち、筆者もその側面から髪の毛をモチーフに制作を行っている。

本論は作品の視覚性と形式について考察した上で、作品が作り上げる空間の射程について論を進めていく。作品が作る世界がフィクションであるのなら、小説や物語におけるメタフィクションのように、空間を内包するメタ空間が成立するのではないかと可能性を考えた。

博士審査提出作品『分岐と合流』では、入れ子状の相似図形がもつ幻惑性、ドロステ効果に影響を受けて制作を行なった。本作では平面作品を組み合わせることによって迷路状の空間を作り上げている。この作品には絵画空間と、絵画空間を部材として作られた迷路状の空間、二つの空間が存在している。本作で

は部分と全体が陥入し合い、鑑賞者が作品のどこに着目するかによって、図と地の主従関係が切り替わる。この空間が持つ二重性は今後の作品制作に対して新たな視点を作っていくであろう。

美術作品は作品が持つメッセージを作り手から受け手に届ける物であり、作品が作る虚構空間と現実を繋げる存在である。この美術がもつ隔たった事物を繋げる力の原動力となるものは、観念連合である。観念連合とは美術作家が事物に見出す直感的な類似性、共通性の事で、ある対象を目にした時に思い浮かべる連鎖的な想像力である。

ここで作品制作に必要なのはイメージを連鎖する力と、それを形にするための技法、素材である。美術作品は、作家の芸術的想像力によって生み出された観念連合を可視化したものと言えるであろう。それゆえ美術は隔たりを繋げる力を持つのである。以上が本論の結論である。

(論文審査結果の要旨)

小林あずさの博士論文「隔たりをつなげる-連続体としての美術制作-」は、美術の役割を「隔たりをつなげる」ことと見なし、その作法を複数の視点から探究する論考である。

「隔たり」という言葉には、さまざまな意味が含まれている。例えば、空間や時間の隔たり、内部と外部の違い、性質や志向の変化、視点や素材の異質性等の「隔たり」が存在するが、筆者はその差異をつなげる媒体としてアートを捉え、独自の制作論へ繋げてゆく。

本論文ではまず①作者と鑑賞者、②現実と非現実、③知覚対象と心象という三つの識別プロセスに着目し、この隔たりを繋げる媒体として先行美術作品を分析し、自作の展開や博士展出品「分岐と合流」に言及し、制作論を深めようとしている。

筆者はさらに分析を複合的に行うため、その隔たりを貫く三つのテーマも設定し、論文の章立てとした。つまり社会や時代を反映するものとしての①物語性、多様なモチーフを孕むイメージに言及する②視覚性、メタフィクション（虚構の中の虚構）のレベルを設けるための③虚構性（フィクション）という切り口である。

こうした論文構成に従い、絡み合う複雑な美術の欲動を説明するため、様々な具体例で補完していった。例えば毛髪、紐、毛綱、パサージュ、言葉遊び、連想ゲーム、結びめ、迷路、呪い……それらはあるものから別のものへ関係を増殖させ、未知の構造を浮かび上がらせてくる。エピソードやトピックが多く、横並びの単調な流れとなり、構成や形式に緊密さを欠くが、「自己」と「他者」を交差させ、「ここ」と「あそこ」を連結する芸術的想像力の働きを多様な素材を散りばめ透かしだしている点は評価できる。結論部分で導き出したメタフィクション等のキーワードを核に、オリジナルな新たな方向を展開してゆくことを強く期待したい。

(作品審査結果の要旨)

幼年への郷愁を感じさせる小物が、ポスター的に処理された鮮やかな無地上に散らばるように描かれている。アミダくじのごとくそれらを結んでいる太い線は、よく見ると三つ編みされた黒髪だ。小林あずさの作品には、形を変えて幾度も「黒髪の紐」が登場する。

かつて東本願寺の宝物殿で「毛綱」という髪による供物の展示を見て以来、黒髪は彼女が長年自己を投影するフェティッシュになっているともいう。手の込んだ供物が捧げられるべき神聖世界、とはいいつつ人体の遺物にすぎない髪が獣臭を帯びて転がっている野生的世界。その両極の世界の意味を視覚的に紐帯させることが、描かれた「黒髪の紐」の役目とも言える。

小林あずさの表現は空間表現から出発してやがて絵画表現に移行した。今ふたたびその絵画自体を間仕切り材として使用し、複雑な空間表現を試みている。提出作品《分岐と合流》。盤上ゲームの意匠のようにモチーフが描き込まれたパネル絵画群は、完結した一枚の絵として鑑賞されるのではなく、迷路状に

組み立てられる。細密に描かれたイメージは一枚の画布から飛躍し、また別の画布の空間に接続するように仕向けられる。無意識というものの広がり、先端を、毛束の先端に見立てるかのようでもある。伸び広がる毛先は、視線の経路として認識される。だが目から入る情報と裏腹に、観客の体は実際の経路の板の突き当たりにつつからないように動かなくてはならない。観客の目のピントを絶え間なく変えさせ、身体感覚を「失調させる」こと。ロジェ・カイヨワの「ミミクリ（擬態）」「イリンクス（眩暈）」を重ね合わせ、「虚構の中に虚構を作るメタフィクション性を空間に取り入れる」こと。論文中では、そのような自作の目的について触れられている。

独特な描画の繊細さや鮮やかな色彩感覚で繰り広げられたインスタレーションは美しく、彼女の美質がよく発揮されている。同時に、ひとまとまりの作品としてまだ情報量が多く欲張りすぎている感も否めない。

審査員からは「虚構の中に虚構を作るメタフィクション性を空間に取り入れる」意図が、若干図式的に表現されすぎているという指摘もなされた。展示の仕方、構成の仕方が、今後の課題である。

だが細部を一つ一つ見ると、数年をかけた労作ということが十分に伝わってくる。また小林の特質と魅力は随所に発揮されており、作品は高く評価された。

(総合審査結果の要旨)

後期博士課程油画領域学生、小林あずさの論文発表、博士修了作品展及びその本審査は2020年12月14日大学美術館3階の修了作品の前で行われた。同日論文発表の後に引き続き同館内別室に於いて本学生の最終審査を行った。同審査は、主査0 JUN、論文第一副査に伊藤俊治教授、作品第一副査に齋藤芽生准教授、副査に坂口寛敏名誉教授の4名で行われた。

本論文は筆者（作家）自身の制作を軸にその制作方法がこれまでの美術家たちの表現形式や作品からどのような影響を受けつつ自作に繋げ、今後の展開への可能性を探ると同時に美術そのものが担う役割、意味をこれまでの様々な表現ジャンル、運動、形式を広角的に引用しつつ歴史的な文脈の中であらためて問うことで自身の制作現場の座標を明らかにする試みとなっている。作品は絵画を主たるメディアとして制作し、そこには毛髪、階段、紐、迷路などのモチーフが複数の支持体に描かれている。それらの作品を仮設の通路の壁体に展示されているなかを観客は移動しながら各々イメージを紡ぎ鑑賞するという遊戯性の強いインスタレーションとなっている。

論文「隔たりをつなげる一連続体としての美術制作」に於いては伊藤俊治先生から、論述される内容も論考を重ねてはいるが尚、後半部に於いては粗削りな部分が多く、扱う事項や解釈についてはさらに精度と論考の執拗さが求められるとの指摘があった。作品「分岐と合流」については齋藤芽生先生より、一点一点の絵画作品はどれも丁寧に描き込まれ魅力的であり作者の絵画技術の高さをあらためて確認できたと言われた。またそれぞれの図像的意味に連続性があるのかどうか、このような展示形式のなかではたして効果的にその点が成功しているかという指摘もあった。坂口寛敏先生からも、個々の作品のクオリティの高さがこの形式と構成のなかでまだ十二分に生かされていないところがあるとの指摘があった。主査としても同様の意見を持った。修了展という限られた空間と条件のなかで展開するには厳しい面もあることは否めない。しかし迷宮のような通路で人がその中を遊ぶことを促すには、通路をつくる躯体壁の高さが低くその為に人の視線が見晴らしが利き“迷えない”。それによって絵画作品への注視が散漫になり鑑賞者は絵のイメージと通路の中で彷徨う自身を重ね合わせて特殊な体験を深めるには不十分であろうと考える。最終審査でもそれらのことについて審議を重ね、また筆者（作者）に対してもこれからの制作プランについて質疑がされた。しかしながら筆者（作者）は論考と実作品への指摘にも自覚的であり、それぞれの問題点改良点にも積極性を見せた回答を示した。審査員はこれらを総合して論文、作品ともに若干の課題を残しつつも博士号取得に相応しい水準に達しているものと判定し、小林あずさの博士審査を合格とした。